

音素体系と書記体系との間に生じたこのようなズレは、ある言語の表記のために外来の文字がはじめて適用される場合にしばしば起こる現象であって、特にその初期の段階にあっては、書記法が当該言語の音韻の体系に完全に合致することはむしろ稀であると言ってよい。特に、文字を提供する側の言語の音韻組織と適用される側の言語のそれとの差異が大きければ大きいほど、このようなズレは起こりやすいと見られる。

この点に関して興味深い例は、ギリシア語のアルファベットの状況に見出される。ギリシア文字は、周知のように、北西セム文字（すなわち「フェニキア文字」）を借用して、それにギリシア的な改変と修正を加えたものであるが、古典期の「標準アルファベット」として完成するまでに種々の変遷過程を経ている。ここで、私は、その中の一局面、すなわち/k/音の表記に関する部分だけを取り上げて見よう。

セム語にはこの種の音に二種類の明確に区別される音素とまたそれを表す文字があった。すなわち<K> (kappa) と<Q> (qoppa) である。前者は‘普通のk’、後者は、現代のアラビア語で‘emphatic’と呼ばれ、調音器官の奥の部分、具体的には咽頭(pharynx)が関与する音である。ギリシア語の側からすれば、このような‘前寄りのk’と‘奥寄りのq’を区別することは全く不必要なことである。けれども、初期のアルファベット碑文によって見ると、<K>はa, e, iの前で、<Q>はo, uの前でというように明瞭に使われ、この表記上の原則は古い時期の碑文ではかなり正確に守られている。しかし、時代が降るにつれてこの原則は乱れはじめ、o, uの前にも<K>が用いられるようになり、<Q>の文字は次第に廃れて、遂にイオニアの標準アルファベットからは姿を消してしまう。

ところで、もしわれわれが古い時期のギリシア語の音韻組織やまたアルファベットの歴史的背景について十分な知識をもち合わせていなかったとしたら、表記面に現れたこのような現象は、そのままギリシア語の音韻史的事実として解釈される可能性がないとは言えない。たとえば、「その文献記録の

初期において、ギリシア語では後代の/k/に対して二種類の文字（「甲類K」「乙類Q」）を使い分け、この区別は当時のギリシア語におけるなんらかの音声・音韻的差異を反映する」と言うがごときである。KとQの表記別がギリシア語の側におけるある音声的な現象を反映していることは確かであろう。たとえばoの前の/k/の発音は、セム語のkよりもむしろqに近いものであったかもしれない。しかし、この発音上の差異は、ギリシア語の音韻的観点からは全く非関与的である。この種のいわば“どうでもよい”音声上の差異がたまたま表記面に映し出されたのは、文字を提供した言語の音韻・書記法上の特殊事情によるものであって、ギリシア語自体の必要性によるものではけっしてない。従って、このような外来的要因に条件づけられた書記法が時期の経つにつれて次第に修正され、自国語の音韻組織により適合した書記体系へと改善されていくことは、当然の成り行きと言ってよいであろう。

5. 結論：母音組織の通時的再構

以上の考察によって、問題となる諸「母音」の性格はほぼ明らかにされた。これを要約すれば、概略次のようになろう。

$e_{(2)}$ および $i_{(2)}$ は、語幹の末尾音節においてそれぞれaおよびo/uの交替音として現れる母音であり、この母音交替を発生させた通時的要因は、語幹の末尾に接する形態素-iの作用であったと推定される。一方、 $e_{(1)}$ は、ある限られた形態論的領域において、-iに終る形式とaで始まる形式（特に「存在動詞」ari〔有〕）との接合膠着によって発生した。上代語の表記に現れた e_2/e_1 の区別は、母音の音質的差異によるよりも、むしろ先行子音の調音差に基づくものと推定される。すなわち、Ce/Cjeのごときである。これらの母音はいずれも日本語の本来的な語幹に含まれるものではなかった。その出現はおそらく文献時代からそれほど遠く遡らないであろう。

次に、オ列甲・乙つまり o_1 , o_2 の区別は、同一の音素/o/の変異音的現象を